町へいこうよ！どうぶつのまち

苺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
町へいこうよ！どうぶつのまち

【Ｎコード】
Ｎ３３５２Ｉ

【作者名】
苺

【あらすじ】
主人公は、ちょっとしたギャルです。
町でままなお話や、住んだりします。
たまに、ある事件がおきてかいけつしていきます。

おせわになります！

私はある時タクシーに乗り、ある町に出かけた。

ただの女である。何も出来ないただの女。

そんな私が、一人で旅立ったのである。

いっけんは、ギャルぽくてちょっとはでで。

でも、友達はたくさんいるんだけどね。

一人で、出かけるのは勇気がいる。

一人ぐらいで出かけたことなんか、学校とかしかでていったことがない。

ある時私は、ずーとタクシーに乗りっぱなしで携帯でメールとか、ゲームやったりとか、テレビ見たりとかしかやっていなくて、ある日寝不足で2日間寝てしまったとき、タクシーのおっさんに、声おかけられた。

「お姉さん！つきましたよ。」

私は、おっさんの声はうっすら聞こえたんだけど、聞いて見ぬふりをした。

そしていきなり大きな声ではなしかけられたので、びっくりしてとびはねた。

そう・・・ここは、私が行きたかった場所についたのだった。

ここは、すごくにぎやかで優しそうな人ばかり。

そして私は、ここでこれからおせわになり住むことになるキレイな町・・・

タクシーを出て、町に入ろうとするといきなり、はなしかけられた。

???「あなたが、新しく住むことになったかただねぇ～」

おせわになります！2

「あのぉーすんません」

???「はい。なんですか？」

「あなたのお名前はなんですか？」

???「あぁー私の名前かい、私はセリアっていうんだよ。町の一番奥の家具店の店をやってるものさ。って・・・ところであんたさんの名前はなんつー名前やの。」

「えっ！　私の名前ですか？　えっへん！私の名前は、マリナです。」

セリナおばさん「そうかいまりなねぇーいい名だ！　よしっ！きにいったよあんたさん。私ねこれから用事があんだよ！だからまずあんたさん・・・いやっ・・・マリナあんたさんわね。いまから町の真ん中にある役場に行きな！　まず、いってからお話してやるからな！」

「あっ！はいっ！わかりました。」

そして・・・役場についた。

「あのぉーすいません！」

???「あっ！はい！何ですか？」

「あのすいません・・・わたしセリナおばさんに役場に行けといわれたんでぇー来たんですけど・・・」

???「あぁーセリナおばさんね！　きいたよ！新しく住むことになった方でしょ！　私は、ここの窓口をやっている、リンナと言います。ここは、郵便や貯金・引越しの手続き等やる場所です。」

「そうなんですか？　それわさておき私は何をすればよいのですか？」

リンナ「そうねぇー　あっ！　まずはそうねお金をあげるわ！」

「えっ！　何で役場からお金をくれるんですか？」

リンナ「あー　ちがうちがう。　これはあなたの両親からよ！　こんな大金役場からあげるわけないでしょうが！」

「すいません・・・」

リンナ「まーいいわ。　でも、ちょっとわ勉強になったでしょ？」

「あっ！　はいそうですね」

リンナ「まー　てつづきもおわったし、そろそろセリナおばさんもお仕事終わったと思うから・・・
家具屋にいってみればいいわ」

「はい。　わかりました。」

そして・・・家具屋に行ったら、セリナおばさんがきょろきょろと

辺りを見ていました。

「セリナおばさん！」

セリナおばさん「あっ！いたいたいた。　ながかったねー何しゃべってたんだい？」

「あーわけわかりませんでした・・・」

セリナおばさん「そうかい。　リンナわさー真面目な時は真面目で適当なときは適当にやるんだよー
まーきにしないほうがいいよ。　これからあんたの住む家を探しにいくんだけど・・・
あんたの気に入りそうな家はあるかどうかわあんたしだいだけどよー　まーみにいくとしますか」

そして見にまわったところ最終的には、ハウス屋にいって家をきめるんだけどねー

「あのーセリナおばさん。　私てきには、学校が近い家がいんだけどー」

セリナおばさん「えっ！　マリナあんたかわってるねー。」

「えっ！　どうしてですか？　ふつうはそうでしょ」

セリナおばさん「わたしがきいたところだとねー１００％ちゅう１０％しか近い家に住みたいって言った人きいたことないよ。」

「じゃーどんな理由で、遠い家の住みたいって言ったの？」

セリナおばさん「えーとねー　たしか・・・ダイエットするためとかその辺かな？」

「ふーんって言うか私子供だよ！　そんなダイエットとか関係ないし。」

セリナおばさん「あーそうだったねー　ごめんごめん！　だってさー子供で引っ越してくる子なんか、全然いないよーだいたいは大人の人だからねー　ところでマリナはどこにするんだい？」

「えっ！　私そんなこといったってー・・・　ここっ！」

セリナおばさん「どこどこー・・・　ってきめんの早っ！　まーいいけどね～　ってそこすごくでかい家じゃんか！　だいじょうぶなのかい？」

「だいじょうぶだよ！　だって私にはセリアおばさんがいるんだもん！」

セリナおばさん「って！　わたしに全部おしつけるきかい？・・・　そうかこのこは、この町にはお母さんもお父さんも、おじいちゃんおばあちゃんもいないもんね」

（私が両親代わりにならなくちゃ！）

「家がきまったところで・・・つぎなにやるの？」

セリアおばさん「そうねーあっ！次は、みんなに挨拶をしにいかなくちゃね！」

「挨拶ってどうゆえばいいの？」

セリアおばさん「そうねーこれからこの町に住むことになったマリナです。
家の場所は、ハッピー公園の右どなりの二階たての家です。よろしくお願いします。　で、いいと思うわよ。じゃーこれからいいにいきましょ。」

そして・・・町の住人のみなさんに挨拶をし終わりました。

「ねーところでさぁーセリアおばさんいまさらなんだけど・・・」

セリアおばさん「なにー？」

「この町の名前ってったいどんな名前なの？　まだきいてなくてさぁー」

セリアおばさん「この町の名前は、ハイビスカス町というそうよ。」

「どうして・・・ハイビスカス町になったのかな？」

セリアおばさん「たしかね・・・私もちらっとしか聞いていないからほんとかどうかは、知らないけどねでも、聞いたことはあるんだよねー。　話が長くなるから、ちょっと短めに話すからね。」

（ある日この町をつくった人がいてね。その人はこの町の形も何もかもその人が考えたそうなの。
だけど、私がきたのは、5年たってからきたんだけどそのときはその方はいなかったから、名前も顔も知らないから詳しくはいえないけどね。この町をつくったときにまだこの町には名前がなかったの

よね。
そして、結構住人がふえたときにハイビスカスの種を植えて2年ぐらいたってからやっとキレイなりっぱな植物になったときつぼみがさいてそれから、花びらがでてきて、キレイな花を咲かせたのさ。
そして、その人が口に出したのは「なんてキレイな花なんだろうか・・・」って言ったらしいわ。
あーそうそう！私が来る前には、一面中ハイビスカスの花でいっぱいだったんですって。
それから、ハイビスカス町になったんですって！）

セリアおばさん「どう？　ちょっと長かったけどだいたいは、わかったでしょう？」

「うん！　だいたいは、わかったわ！」

おせわになります！2（後書き）

どうでしたか？
たぶんよかったとおもいます。
これからもじっくり書きたいとおもいます！
でわよろしくぅ～

新しい学園！

「ところで・・・セリアおばさん！私いつ学校にいけるの？　私早く学校に行きたいし、新しいお友達がほしいわ！」

セリアおばさん「あっーそうだった！忘れていたわ。これもとしかしら？」

「そんなことはいいから、早く行きたいのー！」

セリアおばさん「はいはい！分かりました。これから、役場にに行っててつづきしましょう！」

そしててつづきをしに町の中心となる役場にいきました。

リンナ「あら・・・セリアさんどうしたんですか？　何しに？」

セリアおばさん「あのね、このこを学園にいれたいのよね。それで役場にてつづきをしにきたんだけど、できるかしら？」

リンナ「えぇーできるわよ！　どこの学園に入学するの？」

セリアおばさん「そんなこと言ったって分かんないじゃない！　どんな学園なのか見られるパンフレットはないのかしら？」

リンナ「ありますよ！　どうぞこちらにお座りください！」

「あのぉー私の理想的なのは、見つかるのかしら？」

リンナ「えー絶対に見つかるわよ！　えっとーどんな理想なの？マリナちゃんは？」

「えーと・・・　私は征服が可愛くてちょっとはでっぽいので、校舎がメチャクチャキレイで、イケメンがたくさんいる所かしら！」

リンナ「だったら、この学園はどうかしら？」

セリアおばさん・マリナ「うーんとどれどれー　って！ここはやばい学園ねー」

リンナ「どう？　きにいらない？」

「全然！大満足で言うことなし。」

リンナ「この学園ね。先週つくられた学園なの！すごくキレイでね。今、教師とか生徒募集なんですって！だいたい人数とかがよかったら、１年～６年までクラスが別々になるんですって！」

セリナおばさん「こんな子でも入れるの？これから中学校とか高校もこの学園の名前で行けるの？」

リンナ「そうよ！今、中学校や高校の校舎も今つくっているのよ！　だから今はいるんだったらこのままこの学園の名前の中学校・高校に入れるわよ。　この学園はだいたいは、ちがうところから来た子とか、今はいろうとする子たいしょうなのよ。だから、ここの学園の方が将来もオッケーなのよ！」

「私ここの学園に入るわ！いいでしょセリアおばさん！」

セリアおばさん「えーもちろん！マリナ本人が言うんだものしかたないわ。じゃーこの学園に入ることにするわ！」

リンナ「そう！よかった。だいたいこの学園に入る子はみんな知らない子ばかりで、いちから友達となかよくなるんだったらここのほうがいいわ。ふつうの学園なんか行ったら、仲間はずれにされちゃうからね。　じゃーあさってからはこの学園に通ってね。　はい！これがレインボー学園のパンフレットよ！

それから、私たちは家に帰った。家に帰ったら・・・しらない女の人と男の人がいた。
話しかけると・・・私の新しいお母さんとお父さんになる人だった。
私は、今日からこの人たちの家族になるのだった。

女の人の名前は「ミーレと言う名前だ」
男の人の名前は「ジュンキと言う名前だ」

ママ「あらーマリナちゃんこれからよろしくね。
パパ「よろしくね」

「はい！よろしくお願いいたします。」
（私はだいかんげいだった。どうしてかというと私には本当のお父さんお母さんがいないからだった。
私が一緒にこの町に来る前にお世話になった人は、施設の人だった。だから新しいママパパになってもらえて、私はうれしい。）

通常通りふつうの会話をして、普通に暮らした。

そして・・・レインボー学園に入学するときがきた。
私は、ドキドキした。可愛い征服を着てこの学園に入ることが嬉し

くてはしゃいでしまった。
でも、１週間もしない間私にはもう友達が出来てしまった。
名前は、ミミちゃん、キキちゃん、レイナちゃんです。
友達の自己紹介をします。
一人目はミミちゃん、とてもやさしい子です。
二人目はキキちゃん、面白い子です。
三人目はレイナちゃん、おねえちゃんみたいな子です。
私はこんな仲間たちといっしょにお勉強をします。
そして、いっしょに仲良く遊んでゆく仲間たちに出会えました。
これから、レインボー学園の生徒になりました。

新しい学園！（後書き）

こらからもじゃんじゃん書いていくのでよろしく！

学園生活

今日から、レインボー学園の生徒になった私は友達がたくさん出来ました。
毎日がとても楽しくてたまりません！
さぁー今日から楽しいことが待ち受けているんだなと思うとたまりません。

ママ「マリナ早く起きなさい！　学校に遅れるわよ！」

「もーうるさいな！　眠たいんだから起こさないでよね！今日はたしか・・・土曜日でしょ！学校は、お休み・・・って！今日は火曜日じゃん！おきなきゃ！。」

ママ「ほら言ったでしょ！　早くご飯食べて顔洗って用意しないとバスに乗れないわよ！。」

「分かってるって！　あーーーーーーもーーーー！。」
（今日がはじめての学校生活なのにしょっぱつから遅刻になっちゃうよーーーーー）

ママ「ボソボソと喋ってないで早くー」

パパ「おい！　朝なんだからゴチャゴチャうるさいぞ！」

「あっ！　パパーおはようさん！」

パパ「おーマリナおはよう！」

「じゃーママ、パパいってきまーす！」

ママ・パパ「いってらっしゃーーーーい！」

そして、私は急いでレインボー学園のバスに乗って学校へ行った。

ミミ「マリナーおはよーさん！今日はげんきかー！」

「うん！今日は絶好著ぉーーーー！」

キキ「それはそれはよかった！」

レイナ「マリナちゃんがいなかったら、私たちさみしいですよ！いつも盛り上げてくださる方がいなかったらね！」

「そ・・・う？」

レイナ「そうですよね！みなさん！」

ミミ・キキ「・・・・・・。」

「ちょっと！なんかいってよ！まったく。」

レイナ「そうですよ！ミミさん！キキさん！マリナさんが、かわいそうですよ。」

ミミ「ごめん！だって急に言われたってさーーこっちがどうやって答えたらいいのかわかんないじゃん！」

キキ「・・・・・。」

ミミ「キキも何か言ってよー！もー」

それから、一時間目の授業が始まった。

「あーーーーもっ！意味わかんない！」

レイナ「どうしたの？さっきから怒ってばかりで。」

「だってさー私数学とか嫌いなんだもん！分けわかんないしさー」

ミミ「そうでしょー私もなんだよね～！」

キキ「じしんもって言うな！」

ゴツン！

ミミ「いったーーーーーーーーーー！　なんてことすんのよ！」

キキ「そうゆうのわなーじしんもって言うもんじゃないんだぞ！

まったく！」

レイナ「私たちが教えますからね！　さーがんばってやりましょ！」

ミミ・マリナ「オーーーーーーーーーーー！」

先生「ミミさん！マリナさん！うるさんですよ。静かに勉強が出来ないのですか？」

まーとにかく私はこんな感じで授業を受けています！

ミミ「あんさーマリナー今日さーマリナの家いっていいー？」

「えっ！私の家に遊びに！べ・・・別にいいよ。でも・・・」

ミミ・キキ・レイナ「でもーーーーーーーーーーー・・・・・。なに？」

「ママに聞かないとわかんないや！」

キキ「なんで！マリナはさぁー携帯電話もってんでしょ。だったら電話すれば！」

「あぁーそっかーそうだね！そうしよっと！」

「もしもし！ママ！　マリナなんだけど・・・今日さ皆がさー私の家に遊びに行きたいって言ってんだけどさー今日いい？」

ママ「えーいいわよ！　っていうかさーマリナの家に遊びに来るのはじめてじゃない？」

「うんそうだけどー・・・どうかした？」

ママ「ううん！なんでもないわ！マリナ早く帰ってきなさいよ！」

「うん！分かった！うん、うんじゃーまたね。ばいばいー」

ミミ「どうだったー？」

「うん！いいよだってー大体何して遊ぶの？」

キキ「えっ・・・何して遊ぶって言われたってさー何の遊びがあんのさー」

「なんの・・・って言われてもさ・・・　答えられないよ！」

レイナ「じゃーいいじゃないですか！楽器であそびましょ！」

ミミ・キキ・マリナ「が・・・・楽器ィーーーーーーーーーーーー！」

「なんで、また楽器なのさー」

レイナ「だって、皆さん！ピアノやギター・ベース・ドラムなどやったことあるんでしょ！　私は皆さんのプロヒィールを見たらそう書いてあったんですもん！一回ぐらいはいいでしょ！」

「まーいいけどさー・・・」

レイナ「じゃーそうしましょ！」

キキ「ずいぶんと一人で盛り上がってるなぁー」

ミミ「そうだなー」

「でも、いいんじゃないですか！たまにはさー」

キキ「まーな　私は賛成だ！」

ミミ「私も賛成！」

「私もー賛成ー！」

ミミ「じゃー決まりな！　でもさーマリナの家はさー音楽室みたいな部屋あるのかよ？」

「うん！あるよ！だって私さーギターの練習とかピアノの練習とかするからさーそう言う部屋がひつようなんだー」

キキ「すごいなー」

ミミ「もしかして・・・マリナの家って金持ちなのか？」

「金持ちと言われても・・・私に言われたってさーみんなの反応と、自分の反応とはちがうからさー
私の家が金持ちとかは、分からないよー」

ミミ「でも、私さーレイナの家は別荘があって執事とかメイドとかいるらしいよ！」

「私の家はそんな事する必要が無いもん！」

キキ「そうだよなー　でも・・・私たちがあんな金持ちと一緒にいてだいじょうぶかな？」

ミミ「どうせさーすごい車に乗ってマリナの家にきたりして！」

「えーーーーそんなのこまるよー！」

ミミ「まーいいじゃんか！」
それで私たちは、学校帰りに私の家に遊びに来る事になった・・・。

学園生活（後書き）

これからも私の小説を見て
くださいね！

友達が家に遊びに来た！

そして私は、急いでレインボーバスに乗りそれから待ち合わせ場所からおりて走って帰った。

「ただいまーーーーー！はーはーはー。」

ママ「お帰りなさい。思ったより早かったわね。」

「それで、私は何をすればいいの？」

ママ「そうね、まずさーテーブルのクロスをかえてちょうだい！」

「はーい！」

そして、お菓子などを用意してから、15分たちました。すると・・・

・

ピンポーーーン！　ピンポーーーーン！

ママ「はーい！どうぞおはいりください！　マリナ皆さんこられましたよ！」

「うーーーん！わかった」

ミミ「なに！ここ・・・・。」

「なにが？」

ミミ「だってさー！すんげーごうかな家じゃんかー」

キキ「やっぱり！マリナちゃんはおかえもちじゃんか！　だいたいさーお母さんのしゃべり方みんな、みんな！」

ミミ「うん！確かにこの耳で聞いたよ！」

レイナ「そうですね！　私もびっくりしました！マリナさんのお母様があのように、上品なしゃべり方で！」

「そうかな？いつもあんなふうにしゃべるんだよ！」

ミミ「そうだねー私も聞いてびっくりしたよー。正直ね！」

「まーそんなお話は、おいといて！早く早くお菓子を食べよ！」

キキ「まじでー！すげーーーーーーー！何このお菓子の山をちょーーーーーやばいんですけど！」

レイナ「そうですか？ふつうだと思うんですけど・・・？」

ミミ「あのさーレイナ私とキキはこんな豪勢なお菓子が毎日毎日出るわけが無いでしょ？」

キキ「そうよーレイナとかマリナとかはさー見た目でみればわかるでしょーこのすごさ、このでかさを！」

レイナ「そうですね！　今ようやく分かりました！うふ！」

キキ「ねーミミ！レイナさー今頃分かったって事は今までの生活が一般の生活習慣だと思ってるよ！　　絶対の、絶対に！きっとさー。今その話を聞いてあきれたわ！　とほほ！」

「さー食べようよーー。ねーミミ、キキ、レイナー！」

ミミ・キキ・レイナ「あっ！はい！」

ミミ「ねーマリナー！」

「うん！なに？」

ミミ「あんさー。いつもこんなお菓子やご飯が出んのかよー！」

キキ「うん！私も気になっててしょうがなくてさー」

レイナ「当たり前ですよ！」

キキ「もー喋んなくていいよ！だいたいね。私は今マリナにきいてんの！レイナには聞いてないんだから！もーまったく！」

レイナ「あっ！ご・・・めんなさい・・・。」

「言いすぎだと思うよ！」

ミミ「それより！筆問に答えてよ！」

「あーーそうだった！えーとね。うん！いつもこんな感じで、家に帰ってくる時は結構お菓子が用意されてるからさーたべきれなくって！困ってるんだよね。晩御飯や朝ご飯とかは結構おいしんだけど

んね！」

ミミ・キキ「へーそうなんだー」

ミミ「あっ！もうこんな時間！話してるうちに直ぐ時間がきちゃうね！」

キキ「うん！まーこういう話は学校でも出来るから、また学校ではなしましょうか。」

レイナ「あのー私あまり喋ってないんですけど・・・ちょっとみなさん、さびしすぎですよぉー！」

そして、みんなは家に帰っていった！

みんな「じゃーねー！」

ミミ「じゃーまた明日！」

キキ「そうだね！また明日！」

レイナ「・・・・・・えっえーー。でわまた！」

「うん！じゃーねー！」

そして、今日の一日は終わった・・・。

友達が家に遊びに来た！（後書き）

皆さん！私の本読んでいますか？
きっと！面白いとおもいます。
これからも、「町へいこうよ！どうぶつまち」をよろしくね！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3352i/

町へいこうよ！どうぶつのまち

2011年1月4日03時58分発行